

令和 4 年 6 月 18 日現在

機関番号：34206
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2019～2021
 課題番号：19K02853
 研究課題名(和文) 中学校入学時のリアリティショックはその後の学校適応感にどのような影響を及ぼすか

研究課題名(英文) How does reality shock at the start of junior high school affect subsequent school adjustment?

研究代表者
 南 雅則 (MINAMI, Masanori)
 びわこ学院大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：00827462
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：学校適応感を個人の主観的評価である内的適応感と学校文化や教師側の視点である外的適応感の2軸の関係から捉えた。両者の間には概ね正の相関がみられたが、「劣等感のなさ」と「友人関係」、「教師との関係」、「学習への意欲」の間には相関は有意な相関はみられず、両者の間には内容的な違いが確認された。

また、予期不安が低い場合、入学後の学校適応感は4月よりも6月が高く、9月にはまた4月の水準に戻っていた。しかし、リアリティショックが高ければ、外的適応感は9月になっても6月の水準を維持しており、予期不安とリアリティショックの違いによって入学後の適応感の変化には違いがあることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教師の目には適応的であると映る生徒であっても生徒自身は学校生活のなかで上手くいっていないと感じている生徒が存在する可能性があり、学校適応感を個人の主観的評価である内的適応感と学校文化や教師側の視点である外的適応感それぞれの側面からとらえることによってそうした生徒のスクリーニングを行うことが可能となる。

また、予期不安とリアリティショックの違いによって学校適応感の変化に差がみられたことは、中学校新入生の学校適応感を予測する要因の一つとしてリアリティショックを組み込むことの意義を示唆するものであると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The sense of school adjustment was viewed in terms of the relationship between two axes: internal adjustment, which is the subjective evaluation of the individual, and external adjustment, which is the perspective of the school culture and the teachers. A generally positive correlation was found between the two, but no significant correlation was found between "no sense of inferiority" and "friendships," "relationship with teachers," and "willingness to learn," confirming a content difference between the two.

When anticipatory anxiety was low, the sense of school adjustment after entering school was higher in June than in April, and returned to the April level in September. However, when reality shock was high, the sense of external adjustment remained at the June level even in September, confirming that there are differences in the change in sense of adjustment after school entry depending on differences in anticipatory anxiety and reality shock.

研究分野：教育心理学

キーワード：中学生 リアリティショック 学校適応感

1. 研究開始当初の背景

これまで児童・生徒の学校適応は様々な側面から測定・検討されてきた。古くは松山ら(1969)のスクールモラルテストをはじめ、内藤ら(1985)、小泉(1995)、浅川ら(2002)などの学校適応感尺度が開発され、学業への意欲や友人・教師との関係などが測定されてきた。一方では、こうした教師の側から捉えられる学校適応に対し、生徒自身と学校環境とが適合しているときの認知や感情に焦点をあてた主観的な学校適応感を測定しようとする大久保(2005)、三島(2006)などの尺度が開発されており、学校適応をどのように測定するのかということは未だ十分に整理されていない状況である。

南ら(2011)や南ら(2012)は、中学校入学前の小学6年生の中学校入学前の不安が、中学校入学後の学校適応感にどのように影響するのかということについて教師の側から捉えられる学校適応過程を明らかにしてきた。しかし、教師の視点から学校に適応していると判断するだけでなく、その生徒自身の主観的な適応の側面を考慮しなければ、本当の意味で学校に適応しているのかどうかを判断することは困難である。大久保(2005)は、学校生活における「居心地の良さ」や「被信頼・受容感」などといった生徒自身が感じる主観的な適応感を学校適応の指標としたが、生徒自身が感じる主観的な適応感をどこまでその生徒の学校適応の指標として用いることができるのかは明確にされていない。

このような学術的な流れをみると、学校適応感の測定にあたってはどちらかの捉え方で測定しようとするのではなく、両者の側面を取り入れた学校適応感の捉え方に基づいて測定することが、生徒の適応状態を把握する上で有効なものではないかと考えられる。学校現場では「友人との関係」や「学習への意欲」などのようにあらかじめ教師の側で設定した領域での適応状態を把握することは生徒理解のためには重要である。しかし、それだけではその生徒が学校生活をどのように感じているのかを把握することは難しく、不登校やいじめの潜在要因を見落としてしまう可能性もある。従って、学校適応感を2つの側面から捉えることの意味は大きいといえる。

2. 研究の目的

(1) 学校適応感を外的適応感と内的適応感の2軸の関係から捉え、教師が生徒の状態を簡便な方法で把握することができるよう、新たな学校適応感尺度を開発することを第1の目的とする。そのために、学校適応感を外的適応感と内的適応感の2軸の関係から捉えることが可能かどうかを判断するために、外的適応感と内的適応感それぞれを測定しうると考えられる尺度を用いて内容的に弁別が可能なのかどうかを予備調査において確認する。

なお、本研究では教師の側から捉えられる学校適応を外的な学校適応感(以下、外的適応感)と生徒自身が感じる主観的な適応感を内的な学校適応感(以下、内的適応感)とそれぞれ操作的に定義する。

(2) 中学校生活に対するリアリティショックと学校適応感との関係を短期縦断的に検討し、中学校入学前に感じていた中学校生活への不安とリアリティショック体験の受け止め方の違いが中学校入学後の学校適応感の変化とどのような関係が見られるのかを明らかにすることを第2の目的とする。そのために本研究ではまずリアリティショック体験尺度の開発を行い、そのあとに学校適応感との関係を検討する。

中学校生活に対するリアリティショックは中学校入学直後の学校生活をどのように感じたのか(予想していた学校生活と違うと感じる=リアリティショック体験)である。小学校から中学校への移行後の学校適応については、内藤ら(1985)や都筑(2001)の研究結果から、入学当初、中学校生活に対する不安や悩みが高くて、それは1学期半ばには沈静化し少なくとも2学期にはかなり低くなっていたことが明らかにされている。このように、学校適応を検討する際にはリアリティショックを組み込んだ検討の必要性があると考えられたためである。

3. 研究の方法

外的適応感と内的適応感の内容的弁別の検討のために予備調査を実施した。対象は中学生1年生29名(男子13名、女子16名)で、調査時期は2019年5月と9月であった。その後、中学校入学前の予期不安、入学後リアリティショック体験と学校適応感との関係を検討するために、中学1年生106名(男子45名、女子61名)がを対象とするWeb調査を実施した。なお調査時期は2021年4月、6月、9月であり、3回の調査データは同定された。また、この他に学校生活に対するリアリティショック測定尺度の開発のため2012年4月に収集したデータの再分析を行った。本研究に使用した質問紙の校正は以下の通りである。中学校生活予期不安尺度(南ほか2011)

中学校生活に対するリアリティショック測定尺度(南,2020)、学校生活適応感尺度(浅川ほか,2003)青年用適応感尺度(大久保,2005)を一部改変して使用した。(1回目 ~ ,2回目)

4. 研究成果

(1) 外的適応感と内的適応感の内容的弁別の検討

学校生活適応感尺度（以下，学校生活尺度）と青年用適応感尺度（以下，青年用尺度）それぞれの下位因子間の相関を Table1 に示す。青年用尺度の「居心地の良さの感覚」，「課題・目的の存在」，「被信頼・受容感」因子と学校生活尺度の4つの下位因子との間には，5月の「家族関係」を除いて有意な相関が見られた（一部傾向も含む）。「劣等感のなさ」は「家族関係」と9月の「教師との関係」との間に相関が見られた（Table1）。

Table1 学校適応感の因子間相関係数(右上5月, 左下9月)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
友人関係(1)		.64 ***	.67 ***	.75 ***	.83 ***	.76 ***	.66 ***	.32
家族関係(2)	.40 *		.56 **	.51 **	.40 *	.26	.39 †	.49 **
教師との関係(3)	.42 *	.74 ***		.66 ***	.58 **	.62 ***	.42 *	.33
学習への意欲(4)	.53 **	.52 **	.49 **		.61 **	.75 ***	.66 ***	.33
居心地の良さの感覚(5)	.70 ***	.57 **	.52 **	.49 **		.84 ***	.82 ***	.44 *
課題・目的の存在(6)	.56 **	.62 ***	.58 **	.52 **	.87 ***		.73 ***	.35
被信頼・受容感(7)	.60 **	.62 ***	.62 ***	.55 **	.83 ***	.79 ***		.56 **
劣等感のなさ(8)	.28	.47 *	.40 *	.28	.60 **	.49 **	.66 ***	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

以上の結果から，生徒の状態を適応的か否かの判断が生徒自身の周囲と上手くやれているという感覚の側面と教師が適応の指標として想定している学業や友人関係の側面から評価することが可能であると考えられた。「劣等感のなさ」については「友人関係」，「学習への意欲」(いずれも5月と9月)，「教師との関係」(5月のみ)とは有意な相関が見られなかった。このことは生徒自身が学校生活の中で劣等感を感じていないこと(「役に立っていないと感じる」，「自分だけだめだと感じる」いずれも逆転項目)と友人や教師との関係の良し悪しや学習意欲とは関連が見られないことを示唆している。つまり，友人関係や学業も心配はなく，本人も学校生活を意欲的に過ごしている生徒は適応的であると判断されがちであるが，勉強や友人関係の心配はないものの学校生活のなかで劣等感を感じていたり，学業や友人関係があまりよくないが学校を楽しんでいる生徒が実際には存在する可能性が示唆された。

(2) 学校生活に対するリアリティショック測定尺度の開発

南他(2011)の中学校生活予期不安尺度を参考に16項目で構成された原尺度(社会文化的な領域10項目，対人的な領域6項目)について，最尤法-プロマックス回転による探索的因子分析をおこなったところ2因子12項目が抽出された。信頼性係数は第1因子 $=.79$ ，第2因子 $=.77$ であった。第1因子は，中学校の生活は小学校に比べて窮屈に感じたり，中学校のきびしいきまり等に対する違和感や抵抗感のようなネガティブな感情を反映する項目でまとまった。また，第2因子は，新しい友人関係の構築に対すると

らえ方が反映された項目でまとまった。因子間相関は $r=.12$ でほとんど相関がないと判断されたため，それぞれの因子は異なる概念を説明していると判断し，第1因子を「拘束性」，第2因子を「非親和性」と命名した。

また，各因子を潜在変数とした仮説的モデルを作成し，確認的因子分析を行ったところ，適合度指標は $\chi^2=93.78$ ， $df=53$ ， $p<.001$ ， $GFI=.90$ ， $AGFI=.85$ ， $RMSEA=.07$ ， $AIC=143.78$ であり，概ね妥当な尺度であることが確認された(Table2)。

Table2 中学校生活に対するリアリティショック尺度の探索的因子分析結果

	F1	F2	IT相関
第1因子【拘束性】 $\alpha=.79$			
RS1 中学校はきまりがきびしい	.76	.04	.63
RS3 中学校は自由がない	.63	.11	.50
RS5 中学校はきびしい先生が多い	.61	-.02	.50
RS10 日頃の生活面にきびしい先生がいる	.58	-.10	.49
RS6 授業がむずかしくてついていけない	.53	-.06	.51
RS12 定期テストが負担だ	.52	-.12	.51
RS16 教科によって先生がかかわるので授業になれるのが大変だ	.46	-.01	.42
RS13 部活動の練習がきびしそうだ	.45	.04	.41
RS8 中学生は時間に追われていそがしい	.42	.12	.40
第2因子【非親和性】 $\alpha=.77$			
RS4 ちがう小学校の出身の生徒と仲良くなれそうだ *	-.02	.77	.64
RS7 中学校で親しい友人ができそうだ *	.02	.75	.60
RS2 部活動の友人と仲良くできそうだ *	-.01	.65	.55
因子間相関	—	.12	

*は逆転項目

(3) 中学校入学前の予期不安，入学後リアリティショック体験と学校適応感との関係

内的学校適応感と外的学校適応感の関係をとらえるために，青年用適応感尺度 24 項目と学校生活適応感 15 項目について 4 月の得点をもとに主成分分析を行ったところ，主観的な学校適応感では寄与率 61.0%， $r = .94$ であり，客観的な学校適応感では寄与率 67.8%， $r = .88$ であった。いずれも一次元構造と認められる値を示したため，それぞれの加算平均を内的適応感，外的適応感の指標とした。

予期不安とリアリティショックが中学校入学時における学校適応感に及ぼす影響を検討するため，4 月の内的適応感と外的適応感それぞれを目的変数，説明変数には Step1 で予期不安とリアリティショック，step2 で予期不安とリアリティショックの交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行った。その結果，内的適応感について，Step1 ではリアリティショック得点が男子において有意な負の影響を及ぼしていた ($\beta = -.26, p < .05$)，step2 で交互作用項を投入したところ有意な正の影響が認められた ($\beta = .23, p < .05$)。また，外的適応感について，Step1 ではリアリティショック得点が男女ともに有意な負の影響を及ぼしていた (男子 $\beta = -.27, p < .05$ ，女子 $\beta = -.46, p < .001$)。Step2 で交互作用項を投入したところ男子において有意な正の影響が認められた ($\beta = .36, p < .01$)。男子では予期不安とリアリティショックが低い場合と予期不安は低くてもリアリティショックが高い場合とでは後者の方が内的適応感，外的適応感ともに低かった (Figure 1, Figure2)。このことはリアリティショックが中学校での学校適応感に影響を予測する要因の一つであり，中学校新入生の学校適応の検討に当たってはリアリティショックを組み込むことの意義を示唆するものであると考えられる。

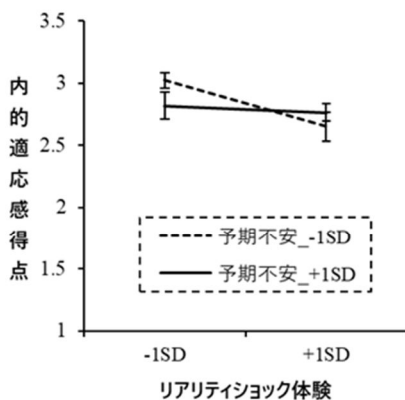


Figure1 予期不安とリアリティショックの高低によって予想される内的適応感(男子)

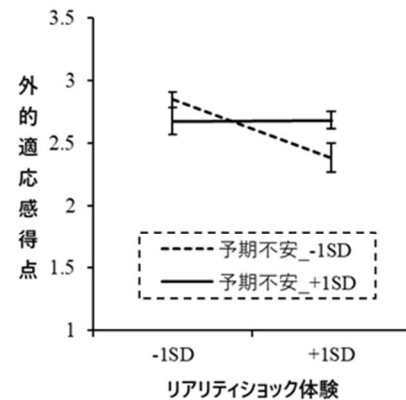


Figure2 予期不安とリアリティショックの高低によって予想される外的適応感(男子)

予期不安とリアリティショックそれぞれの合計得点の平均値によって予期不安低群・高群とリアリティショック (RS) 低群・高群のそれぞれを組み合わせた群 (4 群) に群分けし，予期不安とリアリティショック体験の組み合わせによって分けられた群 (4 群) を独立変数とし，内的適応感，外的適応感をそれぞれを従属変数とする二要因混合計画の分散分析を行った。その結果，内的適応感では予期低 RS 低群における時期の主効果が有意 ($F(2,204)=5.28, p = .008$, 偏 $\eta^2 = .15$) で，多重比較の結果，T1 と T2, T2 と T3 の得点に有意差がみられ，いずれも T2 の得点が高かった。また，外的適応感では予期低 RS 低群と予期低 RS 高群における時期の主効果が有意であり (内的適応感 $F(2,204)=4.86, p = .014$, 偏 $\eta^2 = .14$; 外的適応感 $F(2,204)=6.12, p = .005$, 偏 $\eta^2 = .24$)，多重比較の結果，予期低 RS 低群の T1 と T2, T2 と T3, 予期低 RS 高群の T1 と T2・T3 の得点に

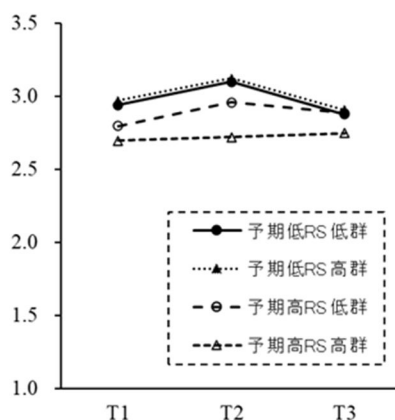


Figure3 内的適応感得点

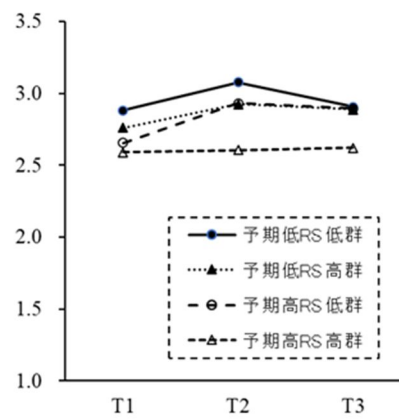


Figure4 外的適応感得点

有意差がみられ、いずれも T2 の得点が高かった (Figure3, Figure4)。予期不安が低ければ、内的適応感、外的適応感とも 4 月から 6 月にかけて高くなるが、リアリティショックが高い場合には外的適応感、内的適応感が 9 月になっても維持されることが明らかとなった。中学校入学前には不安もなく入学後にリアリティショックを感じることは学校生活に対しては適応的であると考えられ、6 月には内的適応感と外的適応感の得点は高くなるが、9 月におけるそれぞれの得点は 6 月よりも低くなっていた。一方、予期不安は低くリアリティショックが高い場合では 6 月には内的適応感と外的適応感の得点が高くなるが、9 月における内的適応感、外的適応感に変化が見られず維持されていた。これは合わせて入学後に感じたリアリティショックにより友人や教師、あるいは学習といった外的適応対象を早期に再構成することができたためではないかと思われる。

総括 (成果と課題)

全体において両者の下位因子の間には有意な正の相関関係が見られたが内的適応感の指標と考えられる「劣等感のなさ」と外的適応感の指標と考えられる「友人関係」、「教師との関係」、「学習への意欲」との間には有意な相関が見られなかったことは、学校適応感を内的適応感と外的適応感の 2 軸の関係から捉えることで明らかにされた。こうした二つの側面から学校適応感をとらえることで、学校適応状態把握のためのスクリーニング資料になると思われる。また、こうしたとらえ方は今後の学校適応感研究を進める上で新しい視点を提供するものである。しかし、本研究の第 1 の目的である教師が生徒の状態を簡便な方法で把握することができる新たな学校適応感尺度の開発という点で見ると、内的適応感と外的適応感を測定し得ると考えられる項目数の増加やそれに伴う被験者側の負担増が懸念され、項目を厳選したうえで信頼性と妥当性が確認される尺度の再構成が改めて課題となった。

また、中学校入学後の学校適応を検討する際には入学前の予期不安に加えて入学後のリアリティショックを予測のための変数として組み込むことの意義が示唆された。中学校生活に対するリアリティショックと学校適応感の関係を短期縦断的に検討したところ、中学校入学前に感じていた中学校生活への不安と入学後のリアリティショック体験の受け止め方の違いによってその後の学校適応感に異なることが明らかとなった。本研究ではリアリティショックの感じ方の違いによる適応感の検討にとどまったが、今後はリアリティショック軽減をどのように図っていくのかを考えていく必要があると思われる。

< 引用文献 >

- 浅川潔司・森井洋子・古川雅文・上地安昭、高校生の学校生活適応感に関する研究 高校生活適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 第 22 巻, 2002, 37-40
- 浅川潔司・尾崎高弘・古川雅文、中学校新入生の学校適応に関する学校心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要, 第 23 巻, 2003, 81-88
- 小泉令三、中学校入学時の子どもの期待・不安と適応 教育心理学研究, 第 43 巻, 1995, 58-67
- 松山安雄・倉知佐一 学級におけるスクールモラルに関する研究 (第 1 報) 大阪教育大学紀要第 部門, 第 18 巻, 1969, 19-36
- 南 雅則・浅川潔司・秋光恵子・西村 淳 小学生の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究, 教育心理学研究, 第 59 巻, 2011, 144-154
- 南 雅則・浅川潔司・福本理恵・古河真紀子・松本 剛・古川雅文 中学校生活に対する予期不安と入学後の学校適応感に関する研究 教育実践学論集, 第 13 巻, 2012, 103-111
- 南 雅則 中学校新入生の「中学校生活に対するリアリティショック測定尺度」開発の試み 日本教育心理学会第 19 回大会発表論文集, 2020
- 三島浩路 階層型学級適応感尺度の作成-小学校高学年用- カウンセリング研究, 第 39 巻, 2006, 81-90
- 内藤勇次・浅川潔司・小泉令三・米澤孝雄 児童の新教育環境移行に関する研究 兵庫教育大学研究紀要, 第 5 巻, 1985, 81-90
- 大久保智生 青年の学校への適応感とその規定要因 - 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 - 教育心理学研究, 第 53 巻, 2005, 307-319
- 都筑 学 小学校から中学校への進学にとともなう子どもの意識変化に関する短期縦断的研究 心理科学, 第 22 巻 2 号, 2001, 41-54

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 南 雅則	4. 巻 12
2. 論文標題 学校適応感における内的な側面と外的な側面からの検討 - 中学校新入生を対象とした予備調査より -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 南 雅則
2. 発表標題 中学校新入生のリアリティショック測定尺度作成の試み
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南 雅則
2. 発表標題 学校適応感における内的な側面と外的な側面からの検討 - 中学校新入生を対象とした予備調査より -
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南 雅則・佐々木聡・真田穰人
2. 発表標題 予期不安とリアリティショック体験が学校適応感に及ぼす影響 - 中学校新入生を対象とした調査より -
3. 学会等名 日本学校心理学会第23回福岡大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南 雅則
2. 発表標題 中学校入学前の予期不安, 入学後のリアリティショック体験と学校適応感との関係
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------